

1 圃場準備～ 育苗期のポイント

①元肥重視で緩効性肥料を主体に

ウリ類は湿害に弱いので、通気性・排水性ともによい圃場を選び、高畝づくり（高さ20cm以上）に努めます。

施肥量は10a当たりNPK成分15kgずつを基本とし、事前に残肥を検査して調整します。ただし、草勢が強い「ガブリコB」は“チッソ3割減”を目安とします。また、砂地やトウガン台木ならチッソを3割増やし、火山灰土ではリンを多めに施します。

低温期の作型では、初期の灌水量が少なく肥料も残りやすいので、元肥を重視します。着果後の急速な肥大に対応するため、肥効が長く持続する有機質の緩効性肥料を主体とし、初期生育用の化成肥料を2割ほど混合します。

マルチ、ハウス、トンネルは早めに準備し、定植時の地温15℃（定植前の育苗最低地温より2℃ほど高め）を確保して、順調な活着を促します。

②育苗は、よい床土と採光に配慮する

育苗に用いる床土は有機物をよく混和し、通気・保水・保温性を高めます。排水が悪い床土では、根が酸素と温度を求めて鉢周りに伸び、鉢底にとぐろを巻くので鉢内に根群が発達せず、根域が狭まります。また、鉢周りは乾きやすく、夜間は冷えやすいので老化も早めます。

灌水は萎れない程度に軽く行って徒長を防ぎ、苗に十分光を当てて、活着のための同化養分を蓄積させます。

「ガブリコB」は3倍体なので、種子が普通種より大きく皮も厚いため、発芽には温度と酸素がより必要です。播種時の地温は30～32℃とし、少なめの水分管理で酸素を確保します。また、強勢の「ガブリコB」の台木には、草勢がおとなしく、カンピョウつる割病に耐病性の「FRきずな」（台木用カンピョウ）が好適です。

→ 紅まくら…甘い香り
で高糖度！市場性
抜群の大玉枕形スイ
カ！



→ 秀山…秀品率抜群！
良質で日もちのよい
大玉種！



→ 紅しずく…裂果が少
なく、低温性に優れ
る赤肉小玉！



→ ガブリコB…タネが
少なく食べやすい！
甘くてシャリ感のあ
る3倍体スイカ！



タキイのスイカを 作りこなす！

「紅まくら」 「秀山」 「紅しずく」 「ガブリコB」 の栽培管理

タキイ研究農場
とうかいりん やすし
東海林 靖

赤くて甘い、高品質が特長のタキイのスイカには、個性的な品種がたくさんあります。

甘みが特に強くて口当たりのよい、まくら形の大玉スイカ「紅まくら」。きれいな丸形で果実肥大・揃いがとてもよく、天候が多少悪くても着果が安定して作りやすい「秀山」。裂果が少なく、皮が薄いのでゴミも少ない小玉スイカの「紅しずく」。そしてほとんど種子がなくて食べやすく、お子様やお年寄りの方にも喜ばれる大玉の3倍体スイカ「ガブリコB」。

今回は、これらの品種を作りこなす栽培の要点をご紹介します。

2 定植～初期生育期の管理

①根群の充実を図る

定植後は十分に灌水し、暖かめの温度管理で活着を促します。根は暖かいマルチの下を横に張った後、水を求めて下に張ります。よい活着が根を横に広く張らせ、根圏を広くします。

活着後は灌水量を徐々に減らし、日照を確保して根の発達を促します。特に「ガブリコB」は草勢が強めなので、高温・多湿を避けて茎葉の生育を抑え気味とし、安定した雌花の着生・着果につなげます。

②低温期の日照確保

スイカは光補償点が高いため、特に低温期の栽培では採光に配慮します。肌寒い日でも、晴れたら外気15℃を目安にハウス、トンネルの換気を行って日照を確保し、夕方は早めに被覆して保温します。寡日照に高温が重な

ると徒長気味となり、雌花の充実やつるもちを損ないます。古い被覆ビニールは洗浄したものを用い、側枝も込みあう前に除いて採光を促しましょう。

順調な生育のバロメーターは、生長点付近の葉色の変化（早朝は明るい緑→日中濃く→夕方は薄らぐ）に現れます。葉色が濃いまま葉が小さくかたい場合は、低温で生長が弱まり、根の発育も損なっている状態なので、軽く灌水して暖かめの管理を行い、草勢回復に努めます。

③高温による雌花着生への影響

子づるの本葉が1～2枚展開するころに、15～20節目の雌花が分化しています。このころ高温にあうと、雌花が飛んだり子房が貧弱になることがあるので注意してください。特に「秀山」は、肌寒くても快晴であれば35℃を超えないよう換気を行います。

3 交配期の管理

①適切な着果節位

果実の肥大と内容の充実には十分な葉枚数が必要なことから、着果節位は18節前後の3番花以降が適切です。着果が低節位（14節以下）の場合は、「紅まくら」では丸玉に、「ガブリコB」では変形や空洞果が懸念されます（仕立て方一例：第1図）。

小玉スイカの「紅しずく」は“熟期が早く高品質”の特性を生かした早出し栽培に適しますが、早出しを意識して低節位には着けず、3番花での着果を基本とします。子づる4本仕立ての場合、1番花では3果着果を目標としますが、草勢によって着果数や節位を調整します。2番花以降は草勢を見ながら判断しましょう。

②果形を安定させるポイント

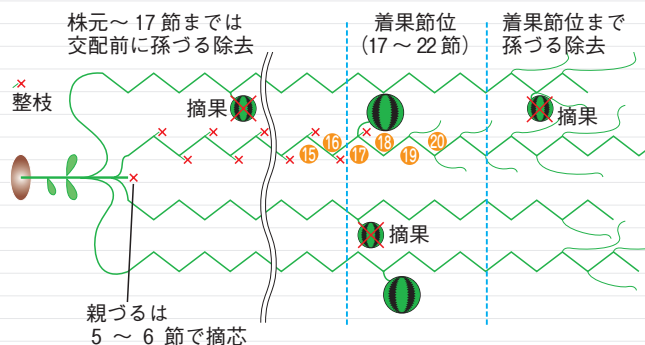
一般に、交配期の温度・水分・葉面積不足は、幼果の形が乱れる（肩流れや尻太果）要因となります。受粉時が適温でも、その後低温にあうと花粉管の伸長が衰え、種子数が減って肥大が鈍り、子房内で種子が偏ると奇形になります。交配時は適節位を守って葉枚数を確保し、最低夜温15℃を維持します。

「秀山」は少々のお天候でも果形が整いますが、「紅まくら」は果形の乱れが丸形品種より目立つので、暖かめの管理で果形の安定を図ります。交配の数日前～着果後しばらくは、最低気温16～18℃を目標に果実の縦伸びを促し、摘果時にラグビーボール状のきれいな果実を残

します。

果実がソフトボール大のころ、果梗部を上（「紅まくら」は横）にして変形を防ぎます。整枝はそれまでに終え、養分を果実に集中させます。

第1図 子づる4本整枝2果どり栽培の模式図



↑「紅まくら」交配期の生育状態。



↑「ガブリコB」交配期の生育状態。

3 交配期の管理

③「ガブリコB」の交配について

「ガブリコB」は、従来の3倍体スイカよりも着果が安定します。ただし、3倍体スイカの花粉には受精能力がないため、交配には普通スイカの雄花が必要です。3倍体と普通スイカの栽植比は3：1を目安とし、人工交

配で確実に着果させてください。3倍体スイカは雌花も普通スイカより敏感なので、交配5日ほど前～着果後数日は暖かく（最低気温18～20℃目標）管理し、雌花の充実と受精、初期肥大を促します。

「ガブリコB」の受粉には……

「ガブリコB」は3倍体スイカで、交配には普通種の花粉が必要なことから、普通種を別畝で管理し、開花日の朝10時までに人工交配で受粉を行うようにします。受粉に使う普通種には、近くに植えても雌花の形で「ガブリコB」と識別のできる「紅まくら」が最適です。

4 着果後～肥大期の管理では……

①追肥や蒸らしは草勢で加減

着果後は果実肥大と種子稔実に養分が集中し、草勢が急激に衰えます。着果が確認できたら適度に灌水し、土壤水分を多めに管理します。朝の換気も35℃を目処に少し遅らせ、温度と湿度を与えて肥大を促します。

ただし、つる先が細くなつてかざし状となり、つる先の持ち上がりが5cm以下と少なくなれば草勢が弱まっている証拠なので、蒸らしを軽減して根の負担を減らし、早めに灌水や追肥を行って草勢を回復させます（第2図）。

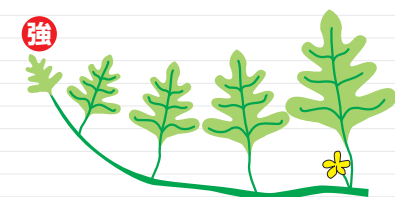


↑つる先の持ち上がり具合で草勢の強弱を判断し、適した管理を行いたい。

第2図 スイカの草勢を判断するポイント

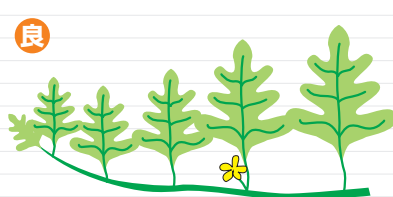
雌花の充実が悪く、着果性が劣る。
【対策】2番花の着果で草勢を落ち着ける。

強



- ・つる先から開花位置まで60～70cm以上。
- ・節間が長い(20cm以上)。
- ・つるが太く、先端が上を向いている。

良



- ・つる先から開花位置まで30～50cm程度。
- ・節間15cm程度。
- ・つるがタバコぐらいの太さで、先が軽く上を向いている。

弱



- 草勢が弱く肥大しない。
果形が扁平となりやすい。
【対策】液肥と灌水で早めの草勢回復を図り、着果節位を高くする。

- ・つる先から開花位置まで30cm以下。
- ・節間が短い(10cm程度)。
- ・つるが細く、水平に伸びている。

5 登熟期の管理では……

①玉直しでムラなく登熟

着果後約1カ月ごろから、リコピンや糖分が蓄積する登熟期に入ります。このころから玉直しを行い、日照を満遍なく当てることで糖度・熟度のムラを軽減し、接地面の着色を促します。果実を横に寝かせる「紅まくら」は、玉直しの際に一気に180度回転させると、接地面が直射日光に当たって日焼けするので、小まめに2～3回に分けて行います（第3図）。

②温度と水分管理で完熟収穫

“高糖度、高品質”の果実を収穫するには収穫前の高温・多湿は禁物で、果肉がうるまない管理を心掛けます。収穫の約2週間前から灌水を控え、低めの温度管理（日中30℃、夜間12℃）にします。ただし、冷やしすぎると裂果の心配もあるので注意します。

収穫前に曇雨天が続いて多湿となり、雨あがりに換気が遅れ、畝に水が入るようでは、二次肥大による空洞果や裂果を誘発し、糖度も十分に上がりません。特に「ガブリコB」は注意が必要です。

スイカの収穫ポイントを第4図にまとめますので、参考にしてください。

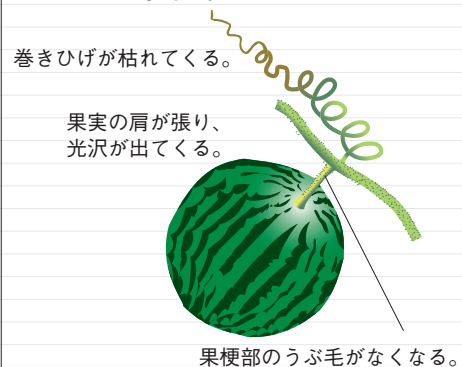
第3図 「紅まくら」の玉直し



↑「紅まくら」の玉直しは、少しずつ回転させて行う。日焼けさせないためにも、2～3回に分けて行うことが大切。

第4図 スイカの収穫ポイント

スイカの収穫期の判断は、開花交配後の日数と積算温度を目安にする。外観からの判断としてはイラストを参考に。



↑「ガブリコB」登熟期の状態。着果が安定し、摘みもよい。



↑果形がきれいな「秀山」は、箱詰めも容易。

各品種の積算温度と登熟日数目安

品種	積算温度	登熟日数
紅まくら	1,000～1,100℃	6月収穫：50日
秀山		7月収穫：45日
ガブリコB	1,100℃	6月収穫：53日 7月収穫：48日
紅しずく	800℃	6月収穫：40日 7月収穫：33日

病害虫の防除

病虫害は計画的な予防とともに、早期発見、早期対応を心掛けます。

梅雨などの低温多雨条件は、疫病やつる枯病、菌核病などが発生しやすくなります。敷きわらなどで雨による土の跳ね上がりを防ぎ、降雨後は早めに予防剤で対処します。

また、早めの整枝で風通しを図り、病原菌の繁殖を防いで、薬剤が内側まで展着するよう配慮します。